こどもの歩み

―発達段階から子どもを見つめる―

塚　原　拓　馬
Takuma Tsukahara

1．はじめに

子どもは何を見つめているのだろうか－。母親の笑顔、目の上のガラガラ、窓の外の青空、それとも、これからの些か悲哀に満ちた希望溢れる己の未来…。大人達は、生まれたばかりの子どもに一杯の愛情と己の満たされぬ夢を託し、笑顔を捧げる（だが、その一方で、望まぬ出生にその子を邪魔に思い、憎しみを持つ親もいることは、ここでは敢えて触れないでおこう）。

さて、返して、そんな子どもを大人はどのように見ているのだろうか。身体全体に比べてやけに大きい頭、ぎこちない手足の動き、世の理不尽などまだ知らぬその瞳、まるで人気のキャラクターに重ね合わせ、（常識人ならば）その笑顔に憎しみと攻撃性を覚えるものはいない。

子どもは、まだ何も知らぬ。そして、子どもが何も知らぬように、大人もその子について何も知らぬ。どんな発達可能性を秘めているのか、何を趣味趣向としているのか、その子の将来も、直近での特徴も、殆どまだわからない。

だが、母親や父親、養育者は、その子を抱き上げて、接吻し、精一杯の愛情を与え、彼（彼女）が泣けばあやし、乳房を与え、オムツを変え、子どもを中心とした日々を、その日から送ることになる。全うな者ならば、直ぐ側で泣き喚く子どもの泣き声を意図的に無視して、目の前の仕事に集中できることはない。言われる通り、「泣く子と地頭には勝てぬ」のであろう。そんな統制の利かない〝怪獣ゴジラ〟を、それでも関わり、知りたいと思い、時に些かの義務感と伴に愛し続ける。

大人は、子どもをどう知り、どう理解できるのであろうか－。静かに動

かず、見栄えも変わらず、全く恒常的な石ころのような対象ならば、いか程たやすく理解できるであろうか。だが、この目の前にいる者は、日々刻々と変化し、意図と情念、暫くすれば言葉と歩行を備える、何とも捉えどころのないものである。どんな術で、どんな感覚と認知で、その子どもを理解すればよいであろうか。その一つの答えとして挙げられるのが、以下に論じていく発達段階である。

書き出しから結論を記すのならば、この生身の、時に弱々しく時に逞しい子どもの特徴を、その個性を、一色端に捉え陳述することができようか。遺伝的にも後天的にも異なる一人一人の子どもの特徴は、図り知れぬものという解答を誰しも期待するのであろう。

だが、しかし、やはり…、林檎の木に決しては桜の花弁が舞うことは…、ない…。

発達段階について

乳幼児に限らず、人は人生に節目というものがある。七五三、入園、入学、卒業、就職、結婚、出産、退職などなど、折々の場面で迷い、悩み、決断を迫られる。過ぎ去り日を思えば、あの時の選択や行動を省み、そして懐かしむ。乳幼児は決して、その時の自律的判断はなく、記憶も未熟なままに、変化成長を遂げる。

では、乳幼児にはどのような節目があるのだろうか。そして、その節目にどんな様相が見られ、どのような特徴を獲得するのであろうか。ここでは、乳幼児を中心に各発達段階を見ていこう。なお、乳幼児を主に取り上げる理由としては、乳幼児は発達が著しいこと、多くの環境刺激を受けていること、発達が急速に進む時期であること、特別な世話（保育）が必要な時期であること（若井ら,2006）、に加えて、健常な発達を遂げているかどうか、そうでないと判断されるならばどのような対処・支援が必要かを検討するための指針、すなわちスクリーニングという目的においても必要であることが考えられる。以下に示すのは、若井ら（2006）による発達区分を参考にした説明であり、一般的にも用いられている発達区分である。

① 胎児期

身体器官の発生・分化が進み、出生後の生活のための生物学的準備が整う。4ヶ月頃から胎動が感じられ始め、胎児は指を吸うというような高度の行動を示し始める。6ヶ月目の終わり頃に自由にまぶたを開閉でき、聴覚もかなり発達していて、母親のお腹の近くで大きな音を立てると驚いて激しく動くことがある。

② 新生児期

主として反射その他の生得的反応様式によって外界に適応する時期である。感覚能力もかなり発達しており、生後数時間もすればガラガラや鈴の音に反応し、味覚も生後2～3週間で急速に発達するといわれる。しかし、全般的には、やはりまだ未熟であり、親または代理者による細かい配慮と適切な介護が必要である。

③ 乳児期前期

まだ身体を動かすことは意のままにできないが、視覚や聴覚などの遠感覚が急速に発達する。3ヶ月ごろには首がすわり始める。神経学的には乳児前期は胎児期後期の延長と見られている。

④ 乳児期後期（タドラー期）

8ヶ月ごろにはハイハイができるようになり、やがて10ヶ月頃にはつかまり立ちし、11ヶ月頃にはひとり立ちするようになり、間もなく満一歳を過ぎる頃になれば多くの子どもがひとり歩きを始めるようになる。

⑤ 幼児期前期

身体・運動面の発達が引き続き急速に進むとともに、自我意識が強まって「第1反抗期」を迎える時期である。特に2歳頃は我を張ったり危険なことをして親を悩ますことが多く、「わからん人」とか「恐ろしき2歳児」という呼び名がつけられるぐらい手のかかる時期である

⑥ 幼児期後期

4歳半の時期は幼児期の心理的発達の面で一つの重要な「壁」または「峠」とみられている。この頃からかなり理屈っぽくなり、それまでの単純な比喩的説明で簡単に納得させられていた「物わかりのよさ」から、一転して理詰めの説明を要求するようになり、しばしば親や保育者をやりこめる。

（参考；若井ら ,2006）

このような発達区分は、一般的に通用されている捉え方だが、独自な視点で各発達のプロセスを区切ることもできよう。著明なところを挙げれば、フロイトは、エスの持つ性的快楽衝動（リビドー）が、各発達段階で満たされない（過剰に満たされる）ときに、その発達段階で部分的に固着（fixation）が起き、人格形成に影響を与えると考え発達段階を提唱した（表1参照）。また、エリクソンは、心理的（性的）側面だけでなく、心理・社会的側面を重要視し、それぞれの段階において社会から求められる課題をどのように解決していくかによって人格のあり方が決まると考えた（表2参照）。

すなわち、ここで重要なものは、子どもの発達プロセスをどのような視点から切り取るか、によって各発達段階論は異なるということである。例えば、上記のフロイトの性的発達プロセスにおいて潜伏期では、リビドーは潜伏しているため、比較的安定的であり、知識や技術の習得に没頭されると考えられているが、エリクソンの漸成発達論ではそう考えていない。勤勉さが顕在化せず色々なことを学べない場合、劣等感を抱き無関心になる発達可能性を説いている。そればかりか、ピアジェによれば性的発達は考慮されず、認知の発達を主に捉えている。

このように、発達プロセスというものは、決して一義的なものではなく、どのような視点で区切るかによって、見えてくる子どもの特徴は異なる。捉え方によっては、子どもは無力と取れるし、寧ろ非常に力動的であるとも取れる訳である。中村（1982）によれば、「発達過程を総括的に捉え、そこから個人の発達的傾向を全体として特徴的に見るならば、人間の一生、すなわち誕生から老いまでをいくつかの時期に区切ることが可能である（p151）」と述べており、これを通常発達段階と呼んでいるわけである。上記に取り上げた社会的習慣と身体的発達による区分が一般的であるが、フロイトやエリクソンの発達段階のほかにも、社会性や道徳性に視点を当てたコールバーグの発達論などもあり、人間のどの特性に照準を合わせるかによって、明らかになる発達の様相は異なり、その区分も変わってくる。

表1　フロイトの性愛発達説

①口唇期（oral phase）　1歳半ぐらい

乳児期に生じる口唇部位の快感によってリビドーが充足されるが、離乳によっても抑制・中止される。

②肛門期（anal phase）　8ヶ月～3歳

排泄時に伴う肛門・尿道の快感や肛門周辺部の快感が求められるが、トイレット・トレーニングによる制約を受ける。

③男根期（penis phase）　3歳～5、6歳

男女共に性器に快感を求め、男根に興味を持つようになるが、これは厳しい禁止を受ける。また、異性の親に対する性的願望を抱くようになる。同性の親への嫉妬や憎しみを抱くが、その一方で父親（母親）を愛しているので苦痛を感じるようになる。男子は強大な父親から去勢されてしまうのではないかという不安に陥る（去勢不安）。また、同性の親とのライバル関係から来る反抗心や敵意も生む（アンビバレント感情）。このように、異性の親への性愛、同性の親への敵意、去勢不安の入り混ざった感情を「エディプスコンプレックス」という。

④潜伏期（latency phase）　6歳～12歳

この時期、性的衝動は沈静し、運動や知識の習得が求められる。

⑤性器愛期（genital phase）　12歳～

エディプスコンプレックスが再燃し、同性間で競争心が表れる。男子は母親のイメージを他の女性に求め、女子は女性性の受容と父親から異性に関心が移り、正常な異性愛へと成長していく。

（参考;KALS　編入心理学）

表2　エリクソンの漸成発達説

①乳児期（0～1歳）「基本的信頼と不信」　＜希望＞
　将来への恐怖や不安
②幼児期（1～3歳）「自立と羞恥」　＜意志＞
　自己への疑念を抱き自立性の発達の阻害
③遊戯期（3～6歳）「自発性と罪悪感」　＜目的＞
　自発性の未発達
④児童期（6～12歳）「勤勉と劣等」　＜能力＞
　劣等感
⑤青年期（12～20歳）「同一性確立と拡散」　＜忠誠心＞
　この時期は「自分が何であるか、社会的役割が何か」を探し求める。このように将来に向けて自己を統合する過程を「アイデンティティ」という。しかし、自己混乱に陥り、自己の社会的位置付けを見失った状態になることがあり、これを「アイデンティティ拡散」という。特に現代の様に複雑な社会では、身体的成長を遂げても社会生活を営めることは難しく、個人の能力を発達させる必要がある。この同一性を確立させるための猶予期間の時期を「モラトリアム」という。

⑥前成人期（20～40歳）「親密と孤立」　＜愛＞
　親密性と孤独感との葛藤を解決する
⑦成人期（40～60歳）「生産と停滞」　＜世話＞
　社会(家族)を未来に導き、保護するという責任
⑧老年期（60歳～）「自我統合と絶望」　＜知恵＞
　自我統合感を確立し、絶望を回避する

（参考;KALS　編入心理学）

これは捉える客体がどれ程奥行きと力感に飛んだものであるかを示しているのではないだろうか。そして、どんな大理論でも完全ではないということ、更に各発達段階論を整合することによって、見つめ捉える子どもの様相は色彩を帯び、理解はより深まると考えられよう。そして、いずれの説でも、その前段階でどのような様相が見られ、何を獲得されたか、どのような発達課題を乗り越えたかなどによって、発達が進んでいくという法則性がある。また、時間的発達（暦年齢）は、個人の発達度や発達課題の成熟度、スキルの習得度に関わらず進んでいくため、発達は常に力動性を帯びた、動態的なものであるということがわかる。

発達の領域と課題

発達にはそれぞれの獲得するべき領域があり、各領域における発達課題がある。著名な発達心理学者ハヴィガーストの言葉を借りれば、発達課題とは、「人間が健全で幸福な発達を遂げるために各発達段階で達成しておくことが望ましい課題を発達課題という。次の発達課題に問題なくスムーズに移行するために、各発達段階で習得しておくべき課題がある」と考え「個人の生涯の一定の時期において起こる解決されるべきもので、この課題を立派に果たせば、個人の幸福をもたらし、以後の課題をも正しく果たせるが、もし逆に失敗すれば、その個人に不幸をもたらし、社会からも承認されず、それ以後の課題を果たすことも困難ならしめるものである」という。

その発達課題として、主に取り上げられるのは、①感覚・運動、②視知覚・認知、③情動・意志、④社会性、⑤言語、⑥人格の６大領域と言われるものである。ここでは、簡単にその特徴となるものをそれぞれ説明していこう。

①　運動の発達

自分の意志に基づき運動することを随意運動というが、生まれたばかりの新生児は、まだそのような行動は見られない。むしろ、生命維持や後のより高度な運動機能の発達と獲得のための準備段階として反射行動が見ら

れる。これは、原始反射といわれるもので、生後１ヶ月～２ヶ月も過ぎると消失してしまう。口の中に乳首や指が入ると無意識のうちに吸う吸啜反射や口元をつつくと顔を向ける口唇探索反射、掌をなでると強く握りこぶしを作るダーウィン反射、ひざの下を叩くと足が上がる膝蓋腱反射などが主なものである。こうした原始反射が消失したあと、意志に基づく随意反応が見られ、手を伸ばしてものをつかむリーチングやハイハイ、12ヶ月を過ぎると歩行などができるようになる。この原始反射はまだ言語や意志行動を持たない乳幼児の脳神経系が正常に働いているかの指標となり、発達診断（スクリーニング）においても重要なものである。しかし、生後２～３日の新生児にブザー音を聞かせて左頬をつついたあと、左側を向けば強化子が与えられるというオペラント学習を実施したところ、頭の回転とは無関係に強化子を与えた群よりも、左を向く回数が増加したという実験結果もあることから（Siqueland & Lipsitt,1966）、新生児であっても行動と環境の変化にある随伴関係は発達早期に見られることがわかった。このことから、随意反応は反射行動を経て発達していくものであるが、行動－環境の随伴性は発達初期より見られているものであり、生得的なものであるということが推察される。

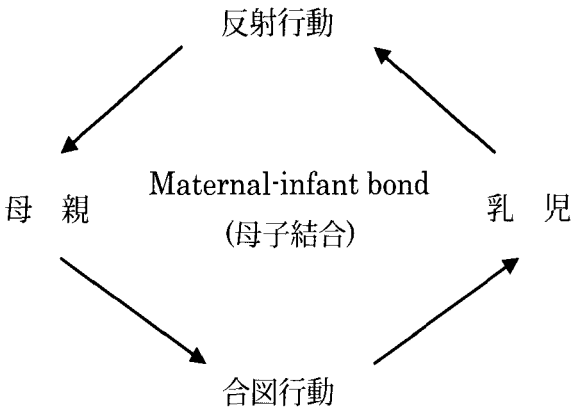

図１　反射行動による母子結合サイクル

（参考；小林 ,1983）

また、こうした発達早期の運動機能は、母親への合図の表出という効用を持ち、そしてそれに対し母親も合図行動を返すといった母子結合が形成されるために必要な役割を果たしている。乳児の反射行動が母親へ伝わり、それに母親は合図行動を返すという円環的・補完的関係により母子の愛着が形成されていく。

② 視知覚・認知の発達

乳幼児の視覚機能はかなり初期段階で発達している。ファンツは選好注視法（PL 法；preferential looking 法）を用いて新生児が多種の図形に対して選択的に反応することを明らかにした。ファンツは生後２～６ヶ月の乳児に、「赤」「黄」「白」「弓の標的」「新聞の切り抜き」「人の顔」の円形図をランダムに２枚並べて、左右に提示し、それぞれの図に対する選好注視時間を測定した。その結果からは無地の図形よりも複雑な図形を、図形よりも人の顔をより好んで注視することがわかった。そして、新生児は初期の段階から「人の顔」に対して選好していることがわかり、視覚機能が見られるだけでなく、関心のあるものに対して選択的に知覚する力があることが明らかとなった。

また、Salapatek(1975) は、新生児の視覚機能の特性（視覚的走査）の発達を調べるために、三角形の図形と図形のない空白の視野を提示したところ、空白の視野では広い範囲に渡って視野が走査されていたが、三角形の図形に対しては角のある部分に集中して走査がなされた。また、同様な視覚的走査実験において、人の顔を提示したところ、生後１ヶ月の児童はヘアラインやあごなどの顔の周辺部位に視野を当てているが、２ヶ月頃を過ぎれば目や口など顔の各中心部位の特徴を見つめていることが明らかとなった。このことから、２ヶ月頃には母親と目と目を見つめ合いコンタクトをとっていることや、発達の早期において乳児は母親の顔を見つめることができるため、母子関係の発達に貢献していることがわかる。

また、物体の知覚だけでなく、環境の全体像（３次元空間）も視知覚機能には必要なものである。つまり、奥行きの知覚であるが、この機能を調

べるために、ギブソンは視覚的断崖という実験を行った。テーブル台のような床は半面が透明なガラスであり、そのさらに床下（本当の床）には同じ模様があり、遠くからみれば一見同じ床に見える。だが、近くから見れば半面はガラスであるため、深い床下が見える（つまり奥行きが知覚される）。そこで、乳児がもしそのガラス板床の境界で立ち往生すれば奥行きが知覚されていると言えるが、難なく渡れれば同じ床であると知覚しているということになる（つまり奥行知覚が発達していない）。結果は、生後6ヶ月頃から断崖の境界で止まり、断崖を恐れる反応を示した。これは、生後間もない間は奥行き知覚がまだ十分に発達していないが、半年後には奥行きの知覚（3次元的空間の知覚）がなされていることを示している。

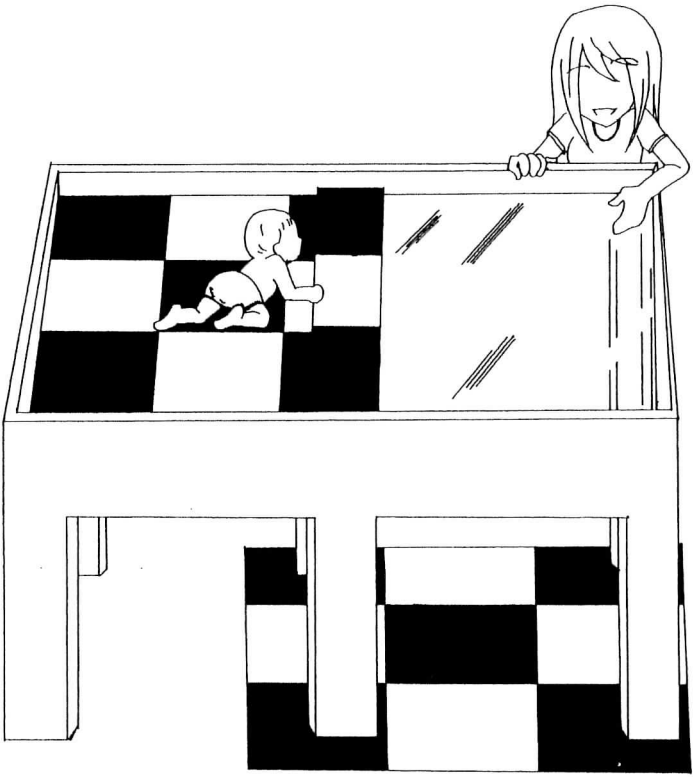

図2　視覚的断崖の実験

では、このように乳幼児は初期段階から視知覚機能が見られることがわかるが、対象を認識することはどこまでできるであろうか。物体そのものを見る（視覚的に知覚する）だけではなく、対象の性質や特徴までがどこまで認知することが可能であろうか。

たとえば、生後6ヶ月ぐらいの乳児は、今見ていた人形をカーテンで隠し、物体が視野から突然なくなってもそれを探そうとしない。つまり、物体が視覚的に失われても、物体そのものは存在し続けることが認識されていないことを示している。これは対象物の永続性という概念で説明されるが、「いないいないばぁ」をして喜ぶことは、対象物の永続性が発達していることを示している。また、ピアジェによれば、対象は視覚的に変化しても対象そのものの性質は変化しないと認識できる保存という認知機能は幼児期にはまだ見られないという。たとえば、同じ容器（コップ）に入っている同じ量の水を、一方は背の高い細いグラスに移し、もう一方は背の低い淵の広いグラスに移し変えたあと、どちらの方が多いかを6歳以前の子どもに尋ねると、「どちらも同じ」という回答はできない。これは、乳幼児は対象を認知する際に、視覚的な見かけに左右されやすく、対象物体の特性や性質、本質といったところまで認識できないことを示している。さらには、幼児は自己の視点で対象を認知するため、他者の立場や視点に立ったりすることができないという認知上の限界があることも明らかとなっている。これは、「三つ山問題」といわれる実験で、幼児の前にある三つの山を東西南北の方向から一度見せ、その後、今自分の座る（見ている）向かい側にいる人から、この目の前の三つ山がどう見えるか図を書いてみることを促すと、幼児は自分の見える方からの図しか描けないことがわかった。これにより、対象物体の認知は、自己の視点に強く依存しており、心的回転や他者の視点に立って物体を認識する認知機能がまだ十分に発達していないことがわかる。

このように、乳幼児には視覚機能は発達しているものの、対象自体が何を意味しているのか、また対象はどんな性質なのか、イメージの中で移動してみればどう見えるかなど、広義の意味での視知覚機能は充分に発達し

ていないことが明らかとなる。これは、まず直接自己の生存や日常に必要な機能である母親とのコミュニケーションや保守防衛といった生命維持機能に準ずる機能以外のより複雑で高度な機能はまだ獲得されていなくても、周囲の大人や親に依存することで補完することができるからだろうか。こうした、高次の認知機能は、読み、書き、推理、計算といった部分にまで及び、後々の学校教育において要求されるものであるが、思考したり抽象的概念で認識し理解したりすることができないのは、如何にこうした認知機能がより複雑な働きであるか、そして環境条件が揃わなければ顕在化されない能力であるかを示している。

確かに、人間の論理的思考自体は、人間特有であり生得的なものであろうが、この論理的思考機能は、他の身体的機能に比べて、多くの環境刺激（養育、教育、対人関係、対物関係）を適切な質量だけ受けなければ、方向性を備えて発達していくことが難しいということが言えよう。

③　情動・意志発達

そもそも情動というものは、学習によって得られたものではなく、生得的なものであるといわれる。進化論で有名なダーウィンは喜怒哀楽といった典型的な情動表出は普遍的であり、ヒトと動物の情動表出は多くの点で共通しているとしている。だが、情動表出の意味や役割はヒトと動物で同じであろうか。また様々な文化圏で暮らす人々に対して統一できるものであろうか。以下では、情動の発達と役割について説明していく。

まだ言語を持たない子どもは、生後２ヶ月以降になると、機嫌のいいときにクーイングを発声し、その時の喜びや幸福を表す。また、不快な時には泣き、その情動をあらわにする。生後１ヶ月の乳児は目の前 30cm ぐらいのところで、大人がゆっくり舌を出し入れすると、自分も同様に舌の出し入れを同期させる。これは、いわゆる共鳴動作というものであるが、表情についても、母親が嬉しそうな表情と発声をするのと同じように発声し、怒った表情と同じように発声することができ、生後間もない時から母親の表情を識別し、情動を表出することがわかる。さらには、1ヶ月も過ぎると、

よく見慣れた顔と見慣れない顔を選択して、見慣れた顔（母親や父親）のほうに微笑をするようになる。これは、社会的微笑といわれるものであり、大人も子どもに微笑をされたことにより喜びを覚え、子どもと大人の関係をより強める役割を果たしている。

そして、4ヶ月～6ヶ月ごろになると子どもは見知らぬ人に対して警戒心を示し、泣くという情動をあらわにし、いわゆる人見知りをするようになる。12ヶ月にもなると、人見知り反応はより顕在化するが、これは人を識別することができ、さらには自分にとって愛着のある重要な他者とそうでない他者を理解することができることを示している。

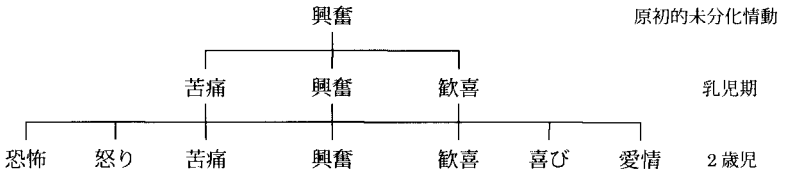

図3　情動発生の分化

（参考 ;Bridges,1930）

また、情動は単に表出することで合図や意志を伝達するための役割だけではない。ソースらは視覚的断崖の実験で（図2参照）、ハイハイする子ども向こう側に母親が恐れの表情で呼んだ場合、奥行きが知覚されるガラス板床の境界で立ち往生してしまうが、喜びの表情で呼んだ場合、危険を伴う恐れのあると感じるガラス板床の境界を渡って、母親のところに行くことができた。これは、母親の表情を識別することができるだけでなく、その意味をも理解し、またそこから得た情報を自分の行動に連動させることができることを示している。これは、社会的参照といわれるもので、親（大人）の表情を見て、そこから意味情報を汲み取り、自分の行動を決定する役割を果たしている。

つまり、情動は子どもが経験していることの意味（意志）を相手に伝

え、その意味に応じた反応を得ることで関わりを可能にしていることがわかる。また、乳児にとって危険性があることや新奇な状況（刺激）に対して、その状況や人の発する意味を理解する他者への問い合わせ（social referencing）の役割を果たしていることがわかる。

そして、情動表出は3歳ぐらいまでの間に、「恥、罪、照れ」などの情動は殆ど発達し、その後複雑な感情を体験することができるようになるが、こうした情動の複雑性や情動の表出をコントロールしたり抑制したりすることも必要になってくる。怒りや嫌悪の感情は社会的場面において抑制されることが求められ、いわゆる情動の統制が発達していくことが期待される。

以上のように、情動には自己の情動表出とその意味、相手の情動表出の意味とそれに対する反応、そして、情動表出によるコミュニケーションと関係性の発展といった重要な役割を持ち、まだ言語が充分に発達していない子どもにとって、生命維持とその後の社会性の発達に対して重要な役割を担っている。このように情動は、生得的機能を基礎とした社会的知能や社会性との発達と関連し合いながら発達していく。

だが、情動は果たして文化において共通であろうか。文化因子は情動に影響を及ぼしていないのだろうか。「菊と刀」で有名なルース・ベネディクトは、「恥」「義務」といった日本人の感情を見事に論説しているが、ラテン系の感情表出に比べアジア系の喜怒哀楽の表出が乏しく、また社会的にも感情を抑制することが望ましいという養育を受けることは現在でも見られることであろう。日本人にとっての笑いと欧米人にとっての笑いの意味や機能はすべておなじではない。いわゆる「お追従」といったものは、表情表出そのものとしては喜びを意味するが、深い意味としては恐れを意味するのではないだろうか。アジア系にとっての笑いや悲しみの表出法は慣習に従ってより複雑性を帯びるものになるのではないか。こうした文化変数まで加味した情動表出が発達されることが、情動の成熟化であり、この視点を含んだ情動の獲得変化プロセスを明らかにしていくことも必要である。

④　社会性の発達

上述した情動の発達において、まだ言語を持たない子どもは情動表出によって、母親とのコミュニケーションをとることで母子関係が発展していく。そして、この母子関係は安定性を持つことで、その後の様々な他者との関係の構築と発展の基礎作りがなされる。すなわち、母子関係は、子どもの対人関係スキルの発達、すなわち社会性の発達に重要な役割を担っている。そして、母子関係が安定性を持った状態で維持されるためには、母子の愛着が維持され発達していく必要がある。そして、安定した愛着に基づく母子関係をよりどころにして、子どもは外界の探索行動を行い、色々な遊びを行うことができる。ここでは、社会性の発達に必要な母子愛着の発達と遊びの発達を見ていこう。

愛着とは人や動物が特定の対象に対して抱く情緒的な結びつきのことである。生後1ヶ月に満たない乳児は誰に対しても愛想よく抱こうとして手の伸ばすと喜んで抱かれる。6ヶ月ぐらいから母親を選択的に好み、自分の側から離れると抵抗するようになる。これは、分離不安というもので、子どもが養育者（母親）から離れると不安や悲しみを示すものである。2歳も過ぎれば、母親の感情や動機を推察し、それに合わせて自分の行動を制御することができるようになる。こうして発達していく愛着は、その後の対人関係のあり方や精神的発達の安定性に影響を及ぼす。

エインズワースは、「ストレンジ・スチュエーション法」という実験で、母親との分離・再会場面で、乳幼児が母親を安全基地として活用できるかを調べた。その結果によると、母親がいなくなっても泣いたりせず、戻ってきても接近しなかったり避けたりする「回避型」、母親がいなくなると泣いたり抵抗したりするが、戻ってくると再会を喜び接触を求める「安定型」、母親と一緒にいても不安な様子で離れると非常に混乱を示す「不安定型」の3つの類型が見られたことを明らかにした。これは、母親の影響もあり、回避型の親は拒否的・強制的で固い性格であり、安定型の親は子どもの反応に敏感で調和的・応答性があり、不安定型の親は一貫性のあるマザリングを与えられないという特徴がある。

このように、愛着関係が安定した形で発達していないと行動において多様な弊害が見られ、それは友達と遊んだり、他者の関係を築いたりしていく対人スキルに強く影響を及ぼしていく。たとえば、幼児が安心して外界の探索行動ができるのも、母親への愛着が安定して形成されており、母親を情緒的な安全基地として活用することができるからであり、いわば「戻る家」がなければ、危険を感じた時や疲れた時に自分を保守してくれる精神的場所がなく、思うように外界で新奇な環境や遊び道具に興味を持って関わることができなくなる。子どもにとって遊びとは、その後の人格や知能、対人スキルの発達の基礎作りとなり、重要な経験であるが、その遊びが安心して行えなくなることは、子どもの発達に大きな影響を与える。

では、この遊びというものは、どのように発達変化し、どのような意味を持っているのだろうか。まず、1歳までは「ひとり遊び」が行われる。他の子どもと仲良く同じ遊びを行うという遊びはまだ見られず、殆ど母親との関係の中でひとりで遊ぶ。1歳半ぐらいにもなれば、目で見て体験したイメージ（表象）を表現する「ごっこ遊び」が見られるようになる。これは、日常経験を再現することができることから日常の動作に対する記憶と知識が備わっていることを示し、またそれをイメージできることは内面的世界が発達してきていることを表している。さらに、「ケーキ屋さんごっこ遊び」などでは、ケーキ屋さんの店員とお客に分かれて遊ぶことであり、すなわち役割演技ができるようになっていることもわかる。この役割演技やイメージによって自分の行動を適宜修正していくことができるようになり、それは自己監視能力（セルフモニタリング）が備わっていることを示している。

また、その後「群れて遊ぶ」という集団的遊びをするようになる。顔なじみ同士で遊びを核として集まり、複数の子どもで共通した目的を持ち、遊ぶことが可能となる。これは、他者とのコミュニケーションが育ち、情動のコントロール能力も求められることから、社会的能力の発達に寄与する。また、集団内で道具の貸し借りや規律があることから、相互交渉を行うことが求められ、家庭とは違った形で仲間同士での現実的な役割演技を

取得していく。この役割取得とは、自他の観点の違いを意識し、他者の視点に立って、他者の要求・意志・信念・感情などの内的特性を推論する能力であり、それによって得た情報を他者交渉において利用する能力である。

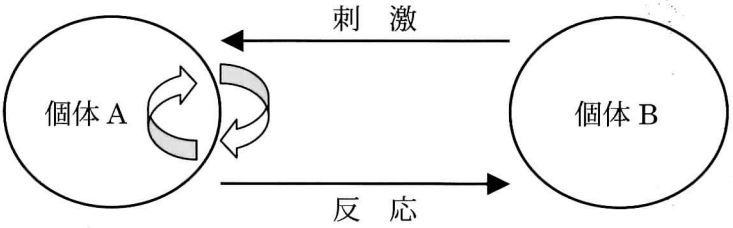

図4　役割取得のリハーサル

そして、この役割取得は、対人場面において、他者の行動によって刺激され、それによって自己の役割取得が喚起されることで発展し、(現実に他者が目の前にいなくとも)内なる他者が自己を刺激し、リハーサルによって最適な反応を表出化することで発達していく(図4参照)。

このように、遊びを通して幼児は、対人場面におけるかかわり方や、自己の行動の仕方、役割行動といったより高次な行動を身につけていくことができ、それまでの母親との二者関係から、三者関係以上の集団内行動において必要なスキルや知識を育んでいくのである。また、集団内行動や社会的行動で求められる、その集団や社会において受け入れられているルールや規範、慣習を守るという道徳性や、他者の利益や幸福のために外的報酬を期待することなく自発的なされる愛他的行動といった、より成熟した社会的行動の取得にも発達していく。

以上のように、安定した母子愛着関係、それに基づく遊びの発達、道徳性や愛他性の発達がなされることにより、子どもの社会性は育まれていくことがわかる。だが、現代の遊びは必ずしも現実の他者との遊びとは限らず、いわゆるバーチャル・コミュニケーションが盛んに行われており、このような遊び方や遊びの性質が、子どもにどのような影響を及ぼしていく

のかについても、今後の保育教育や発達支援に向けて明らかにしていく必要がある。

ちなみに、著者はバーチャル・ゲームやバーチャル・コミュニケーションを盲目的に批判するつもりは毛頭ない。どんなに批判したところで、このような遊びの在り方やコミュニケーションの在り方は、既に現代の重要なコミュニケーション・ツールとして存在している。今後、それがなくなることは考えられず、寧ろより高度化され多様化されていくことが確かである。それは、また決して発達への否定的な影響ばかりではなく、情報探索や情報精査の訓練、そして情報の多種性の知覚といった肯定的な影響もあり、そしてこのような能力は現代の子どもたちが後に成人となり、社会生活で求められる重要な社会的・職業的スキルであることは間違いないことである。寧ろ、どのようにバーチャル・ゲーム遊びを活用し、「どのようにそれと付き合うか」を教育していくことが必要なのである。

最後に、社会性を育てるもう一つの基礎となるもの、つまり母子愛着の不安定性要因の方が、現在の懸念すべきことである。それは、単に女性の社会進出によって、母親が専業主婦として子どもの発育に関わる時間が少なくなったという理由だけでは片付けられない。父母ともに共働きの家庭は兼ねてより存在し、その子どもが必ずしも発達に何らかの支障をきたしていた訳ではない。それは、働き方の問題であり、会社や地域の認識によるものが大きい。フルタイムで働くことは、社会的労働で必ずしも必要な条件ではなく、父母がそれぞれ子どもの教育や家庭生活とのバランスに適合した職業形態を選択できることが重要である。いわゆるライフ・ワーク・バランスの推進が、多くの私企業で認知され実行されることが急務な要件ではないだろうか。

⑤　言語の発達

言語は意志伝達の道具としての機能である。まだ言語を持たない乳児の場合は、身振りや手振り、顔の表情、目の動きなど非言語的表現によって伝達するが、このような乳児が言語を道具として活用できるようになるま

でにはどのような発達過程があるだろうか。

生まれて間もない乳児は、非言語的表現によって母親（養育者）と相互作用を発展していく。この相互作用と並行する形で発話が徐々に見られ、機嫌の良い時にクーイングという発生を行うようになる。また、2ヶ月を経つと喃語と言われる［a］［e］などの一音節からなる音をランダムに発生するようになる。10ヶ月ぐらいになれば、「ニャンニャン」という語が広範囲に渡って使用され、1歳ぐらいになれば特定の対象（ねこ）に限定的に用いることができるようになる。また、2歳を過ぎれば2語発話が可能になり、文法の基礎も形成されていく。

図5　拡張の例

そして、3歳頃から日常会話が可能になり、外言といわれる発話が頻繁に発生されるが、これはまだ伝達を必ずしも目的としないことから、自己中心語というものである。ピアジェによれば、まだ充分に社会化されていない心性であり、就学につれて消失されていくと言われる。児童期以降には、約6000語以上が理解できるようになり、自己中心語は言語の2つ目の機能である、自己の行動の調整と思考の道具としての機能、つまり内言へと発達していく。

さて、なぜ障碍などの特別な事情がなければ特殊な訓練を受けなくても、言語を獲得できるのであろうか。意味のある文章を作ったり、理解したりすることができるのはなぜであろうか。大人は常に正しい言語を話すとは限らないのに、子どもは殆ど正しい言語を習得していくことができる。言語学者チョムスキーによれば、人間には生得的（遺伝的に）言語を習得できる能力を持っているからだという。これは、LAD（Language Acquisition Device）というものであり、本来人間の脳機能として備わっていると考える。また、ブルナーによれば、LADは成長過程において、自動的に働くものではなく、母親と乳児の相互作用を通して機能するものと考え、LASS（Language Acquisition Support System）と呼んだ。このように、言語の発達は、基本的には遺伝的要因が基になっていることがわかる。言語は他の動物と比べて人間に特有な機能であり、この言語があるから思考や行動が高次なものとなるのである。だが、遺伝的要因によって、言語がすべて規定されないのは、bilingualの子どもを見れば一目瞭然である。どの国に育ったかによって、遺伝的には日本人であっても、アメリカ圏で育てば英語が母語として獲得される。

すなわち、ここにはたとえ遺伝的に備わっているLADであっても、どの環境で育つか、また言語を習得するに足り得る環境であるかによって、言語の発達は規定されることがわかる。確かに、言語発達には遺伝で規定されるものが、他の発達領域に比べれば、その比重は大きいものであろう。だが、言語というものは、日常を司り、その子どもの人格の発達にも影響を及ぼす。言語は、機械音とは違い、その場や相手によって多様な意味と

色彩を帯びる。その言葉の機微を感じ取り、また自らの言葉に汲み込んで発することも必要になる。ただ言葉そのものでは、決して流暢な会話や文章で表現することはできない。一旦、習得した言語を、どう使い、どう情動と共鳴させるかは、その子どもがどのような養育環境で育ち、何を学んできたかによって、真の言語発話が可能になることはより強調されるべきことである。

⑥　人格の発達

日常的には性格（character）という用語が使われている。対し、ここでは人格（personality）という用語を用いる。性格とは知能を含めないが、人格は知能を含めるものである。また、性格という語では、「三つ子の魂、百まで」というように、一生さほどの変化なく静態的で固定的なものであるが、人格の場合は、常に変化する環境刺激の影響を受けて、発達変化する動態的で可変的なものである。

さて、この人格の発達に影響を与えるものは、まず遺伝的要因が考えられる。ダーウィンの進化論から発する遺伝優位説は、「リンゴの木にミカンはならない」というものを示している。また、ローレンツにより刻印付けという現象が見出され、生後初めて接する相手に追従する行動が固定化するものであり、カルガモの後追い行動により実験されたものである。

だが、アヴェロンの野生児や狼に育てられた少女アラマとカラマが発見され、人間の遺伝子を持っていても、育つ環境が野生であり、人間社会から隔絶された環境で育った者は、その後人間らしい行動（言語や二立歩行、スプーンやホークで食事を取る）は獲得するのに難しかったことから、どのような環境で育つかが重要であるという環境優位説が唱えられた。

そして、現実には遺伝的要因だけでも環境的要因だけでも人格が形成されるのではなく、両者の要因が合わさって（加算的に）発達するものであるという輻輳説が唱えられた。下記の図３では、ADC は環境を意味し、ABC は遺伝を意味しており、XZY の特性は遺伝と環境が均衡して働いていることを示している。また、XZY が C に近くなれば環境要因が強くなり、

A に近くなれば遺伝要因が強くなることを表している。

しかし、これでは、全体的な発達でしかなく、個々人に特徴的なスキルや能力、特性といったものは受ける環境要因のレベルが異なることでより開花したり、逆にさほど顕在化されなかったりする。そこで、「遺伝も環境も」相互に作用しあい、浸透しあって人格は形成されるものと考えられた（相互作用説）。なお、近年、飛躍的に発展している遺伝子工学により、遺伝子（DNA）の役割の大きさが注目され、再び遺伝的要因が強調されている。

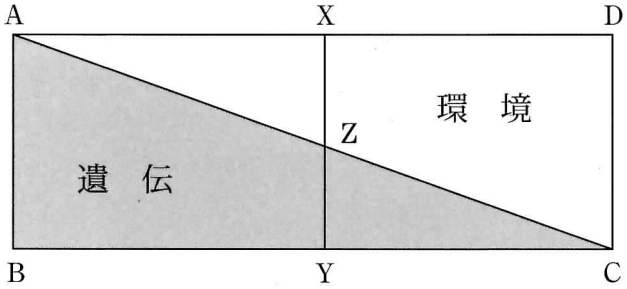

図 6　遺伝と環境の関係

こうした遺伝と環境の論争は、当初より「氏か育ちか」という論争によりとり扱われてきた。しかし、遺伝子工学が発展しようとも、環境の影響がマスコミで騒がれようとも、依然として最も大きい要因は家族という（半ば神話的）変数である。家族は（養子でなければ）遺伝的要素を強く持つものであり、かつ環境刺激の最たる影響因であり、どちらも最大の影響犯である。現実的には「氏も育ちも」という結論は、「家族」という概念に集約できるのではないだろうか。家族変数は、人格の発達において遺伝と環境の相互性を解明かす重要な鍵であろう。そして、個人は家族というシステムバランスの中で様々な内外の環境刺激を受けるため、家族のシステムバランスによって個人の発達を捉えていく必要があろう。従って、人格の発達には遺伝と環境、そして個人と家族という視点の併合が重要であろう。

発達の基本原則

上述したように、発達段階は各段階が断片的に発生するのではく、前段階との関連で次の段階へと移行していく連続性のあるものである。また、発達にはどのような方向性へ発達していくのか、ある程度規定されるものがある。さらに、発達過程では、個体（子ども）の構造や、心身の機能がしだいに細分化されていき、独自の働きをすることができるようになる。上述した発達段階でも、単にある視点から人の発達を区分したのではなく、次の発達段階との関連や、心身の機能の自律性を備えていく過程を示していることに相違ない。以下に、発達段階によって子どもを見つめる際に必要な基本原則を３つ挙げておこう。

①　発達の連続性

ハイハイができる前に、二立歩行ができる子どもはいるだろうか。ハイハイは、常に二立歩行の前にあり、歩行の準備と訓練になっているということを疑うものはないであろう。このように、発達にはその前段階で獲得されたスキルが、そこで固定されるのではなく、次の発達段階において適用され、より高度なスキルや機能を発達・獲得していくことができる。つまり、発達は継続・連続的であり、決して静的で固定的なものではないということである。ある時点で獲得されたものは、それ以降の発達に影響を与え、その相互作用によって機能や構造が作られていく。

ただし、この連続性という点がときに厄介なものとなることもある。連続的ということはすなわち不可逆的ではない、むしろ可逆的であることをも示される。二立歩行ができた幼児がまたハイハイに戻らないとも限らない。これは、退行といわれる現象であり、フロイトによれば自我を脅かす体験がある時、自我を外敵から守るための防衛機制であると説明される。それは、我々の生きる外的環境（社会生活）が如何にストレスフルなものかを示し、そして発達は絶えず変動する環境刺激により影響を受けているかがわかる。

② 発達の方向性

パパ・マンマなどの1語発話や2語発話ができなくては、「今日、ユウキくんと虫取りにいったんだ。ほら！」などという、日常会話ができることはない。これも連続性と並んで、1語発話、2語発話といった順序性が必ず見られよう。ハイハイの後にひとり立ちがあり、そして歩行があるように、次の発達へ向かうべき方向性がある程度備わっている。身体的な部位で言うならば、「上部から下部へ」、「中心部から抹消へ」と常に一定の方向性が備わっている。ただし、これも環境刺激の如何によっては変動される。有名な野生児アラマとカラマは、ヒトとしての発達の方向性が著しく閉ざされたが故に、手先などの抹消部位の発達は阻害されている。

また、心理的な発達はどうであろうか。前述したエリクソンの漸成発達論においては、青年期に自らの主体性となるアイデンティティの獲得が中心になることが説明されているが、後発途上国などにおいて、生まれながらにして発達のプロセスが規定されている民族などには、殆ど無縁なものであろう。ある時期にある儀式を行うことで、所属民族における成人としての認証は与えられるのであり、エリクソンが説くような心的な細部への変動は経験しないと考えられよう。

③ 発達の分化と統合

方向性と並んで、発達は初め漠然とした動きや状態から、徐々に細部へと変化していく。乳児は、単に目の前のものを掴む（リーチング）という動作を行うのにやっとであるが、次第に指先(親指と人差し指)の動きが発達し、人差し指で細部の動きができるようになる。このより大きな全体的な動作より小さな部分的な動きへと分かれて行くことを分化という。そして、その指は食事の際にお箸を使うなど、新しい一つのまとまった動きへと発達していく。この一つのより高度な動作に有機的にまとめあげられることを統合という。

ただし、この分化と統合についても環境の影響を受ける。前述した野生児の動作阻害はもとより、分化がなされても、統合が必ずなされるとは限

らない。高度なスポーツ技術のように、手足の複雑で高速な運動は、ある一定の教育と訓練を施さなければ獲得されない。同じように、統合については、お箸を使う時に下手な使い方をすれば母親に手をパシッと叩かれるなど、日常的な動作レベルにおいても、親からの躾が適切であることにより、一定レベル以上の動作が獲得される。

このように、発達の規定要因としては、①連続性、②方向性、③分化と統合という原則があるが、いずれも環境との相互作用により発達が促進され、また阻害されることがわかる。すなわち、発達は子どもが環境に働きかけ、環境も子どもに影響をあたえる相互作用の中で、生じる現象であるということがわかる。また、発達の速度や様相も個々人で異なるのは、このような環境刺激との相互作用により生じるものであり、段階に正確に従った一義的なものではないことがわかる。

では、発達を促進させるには、連続性と方向性を備えた環境刺激を与えることで叶えられるであろうか。例えば、ハイハイをする子どもに、より高次な機能（階段のぼり）を習得させるために、英才教育を施すことで、通常の発達よりも早く獲得させることは可能であろうか。確かに、ある程度可能であろう。ゲゼルは一卵性双生児の2人の子どもに「階段のぼり」を教えた。Aちゃんは生後46週から6週間毎日英才教育を施し、Bちゃんには52週目から階段のぼりを教えた。結果は、確かに初めのうちAちゃんの方が早く階段のぼりができていたが、2週間後にはすっかり追いついてしまった。この場合、英才教育の効果は高いといえるだろうか。

このように、より早い発達段階の高度なスキルを習得させる英才教育は、ある程度効果は見込めるものの、必ずしもそれが後々の発達に肯定的で発展的な影響を与えるとは限らない。ゲゼルはこれを「レディネス」と呼び、ある学習を受け入れることのできる準備状態があると考えた。このレディネスがない状態で、より先の発達課題を教育しても、それはあまり効果が期待できないというものである。環境刺激の多寡や質量によっても発達は影響されるが、それは常に遺伝との相互作用であることが強調される。

子どもを見つめて（発達段階の功罪）

以下の図をご覧頂きたい。有名なサルバドール・ダリの「記憶の固執」である。この時計の歪みは一体何であろうか。物質的な時計が歪むことはあっても、物理的な時間が歪むことは知覚的にはあり得ない。勿論、アインシュタインの相対性理論は時間の可変性を証明したが、我々の時計の中の時間は常に同じであろう。

だが、それが個別性を持ったとき、物理学の相対性とは、また違った形で時は変形する。見るのも虫唾が沸く嫌な上司と同じ席で会食する時は永遠のように感じ、抱きしめて壊したいほど愛する恋人との時は、まるで瞬きのように刹那的である。

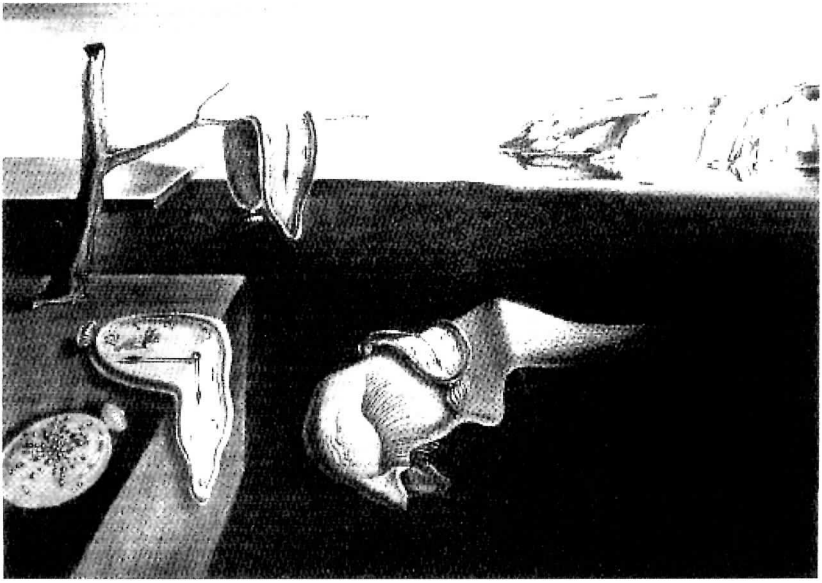

図７　「記憶の固執」

（出所 ;http://www5.ocn.ne.jp/~thanatos/dali.htm（所収 ;Rita Cater,2003））

物理的でもない、物質的でもない、我々には日常を送る、人生を色取る、個々人の時間を持っている。それはその人の生きる実存的時間である。便宜上、誰もカレンダーを見て、それに従い暮らしているものの、決して一時、一時を時計やカレンダーと共応して感じ、暮らしているのではない。

我々、人の実存的時間は、その人の現存在によって決まり、それから逃れることはできない。だとするならば、今まで、論じてきた子ども発達段階というものは、全く無味乾燥なものとなるかもしれない。なぜならば、この発達段階は、いわばカレンダーによる時間軸で捉え、説明されるものだからである。貴方にとっての一年と、目の前の子どもにとっての一年は、実存的には決して同義ではないが、カレンダーでは同じであるように、一人一人の子どもにとって、時間の体感と意味は異なるものの、発達段階による子どもの発達軸は常に一定である。

だからといって、著者は、「理論は実践（現実）を超えられない」、などと稚拙なことは言うつもりはない。子どもを捉える上で、この発達段階に基づいた理解は有益であり、また発達段階が物理的時間軸に基づかなければ、一体何に従って、子どもの行動特徴とその変化を説明すれば良いのか解に困るであろう。

ただ、この発達段階には、多くの理論と同様、万に一つの例外を想定していないということである。発達段階で説明してきたプロセス、諸理論が現実の生きた子どもを捉え理解する上で全く役に立たないのならば、それは理論が稚拙であるか、精緻化され過ぎて、難解であるかのどちらかであろう。逆に、理論が個々の事例をよく帰納した思考に従って規定されたものならば、必ず実践的である。

だが、人の一生を説明する際、必ず他人に理解されない感情や体験があるように、子どもの発達プロセスから子の特徴を探る場合、少なからずそのプロセスから外れる例外的な子どもが存在するのもまた事実である。その子どもを単に障碍と特定するのはある意味容易いが、その例外的な子どもの様相を密に寄り添って深く理解する姿勢がなければ、逆説的に全ての子どもに対して、誰一人として理解することは不可能であろう。

大人は、時に発達段階から子どもを見つめ、時に己の実存的時間軸から子どもを見つめる。だが、同時に子ども自身にも実存的時間はあり、子どもは生まれ持った自身の時間軸に従って成長していく。林檎の木に決して夜桜が舞うことはないが、その花の咲く速度や咲かせ方は個人によって異なり、だからこそ少し早く舞う夜桜の花弁は、人に儚さを与えるのである。子どもを見つめるにあたり、その子の物理的存在からの眼と実存的存在からの眼という、二つの眼を開いて見つめていくことにより、子どもを深く理解できるのであろう。

引用・参考文献

青柳肇・野田満　2007　ヒューマン・ディベロプメント　ナカニシヤ出版

Bridges,K.M.B. 1930 A genetic theory of the emotion. Journal of Genetic Psychology, 37, 514-527.

de Villers,P.A & de Villers,J.G 1979 Early languages. Harvard University Press.

KALS 大学編入対策講座　2006　基礎シリーズ編入心理学テキスト　河合塾ライセンススクール

小林　登　1983　母子相互作用の意義　周産期医学　13 1823-1826.

中村昭之　1982　心理学概説　八千代出版

無藤隆・岡本祐子・大坪治彦　よくわかる発達心理学　ミネルヴァ書房

無藤隆・高橋恵子・田島信元　1990　発達心理学入門Ⅰ　東京大学出版会

リタ・カーター著　藤井留美訳　脳と意識の地形図　河出書房新社

Scorce,J.,Emde,RN.,Campos,J., & Klinnert,M. 1981 Maternal emotional signaling : its effect on the visual cliff behavior of one-year-olds. Paper presented at the Meeting of the Society for Research in Child Development, Boston（ブレムナー ,J.G.　渡辺雅之（訳）1999　乳児の発達　ミネルヴァ書房）

Siqueland,E.R., & Lipsit,L,P. 1996 Conditioned head-turning in human new-borns. Journal of Experimental Child Psychology, 3, 356-376.

塚野州一　2000　みるよむ生涯発達心理学　北大路書房
若井邦夫・高橋道子・高橋義信・堀内ゆかり　グラフィック乳幼児心理学　サイエンス社

謝辞

本研究は、平成19年度上田女子短期大学研究助成費を受けて行われた。この場をお借りして厚く御礼申し上げる。